

榎本武揚とえりも・・・古道を歩く・・・

稲木 静恵¹⁾

はじめに

榎本武揚はえりも町(当時は幌泉)を訪れ、その様子を「北海道巡廻日記」に残している。最近、当時の古道であった様似山道は復元整備され、2003年には猿留山道も復元に着手された。その一環としての催しである「猿留山道復元ボランティア事業2010」(9月18日~20日)にこの度参加して、当時の山道がどの様なものであったかを現地で想像することが出来たのは貴重な体験であった。また、この時頂いた『えりも町・ふるさと再発見シリーズ』には、かつてこの山道を調査した伊能忠敬、松浦武四郎などに関する文献が記載されていて、そこから多くを学ぶことが出来た。さらにこの度、榎本とえりもとの関わりを書き記す機会を頂いたことは望外の喜びである。

今回の事業には猿留山道復元作業だけではなく、様似山道歩きも日程に組み込まれていた。これら二つの道は、幕末期に北方警備のため日高山脈を横断する隘路を整備する必要に迫られ、寛政十一年(1799)に幕府の資金で、最上徳内、中村小市郎らによって拓かれた道である(注1)。明治新政府の一員となっていた榎本は、これら二つの道と、さらに寛政十年に近藤重蔵が開削したと言われているルベシベツ山道を通して広尾に向かったと思われるが、ルベシベツ山道の方は未だ復元されてはいなかった。

これらの道が出来る以前、人々は日高山脈が直接海に落ち込む難所である襟裳岬一带の、僅かに海岸にへばりついている砂地や岩々の上を、危険と隣り合わせで通行するしかなかったのである。幕府の蝦夷地薬草調査の一行であった絵師谷元且は、様似の海岸の様子を

「家屋のような大きな石が浜通りに砕け落ちて道

が無くなっている。岩の角の上を伝って通る…怒濤を避けて波が引くのを待ってまた次の出た岩の先をまわり…」と描写している(注2)。またこの日記には、海岸線を難儀して通行する様子を生き生きと描いた附図が添えられている。(注3)



様似山道からえりも方面を望む

さらに、えりも岬の東側百人浜を越えた先も断崖の続く険しい所であり、様似海岸同様波を避けながらの岩の上を通行するしかなかったため、猿留山道が作られることとなったのである。ただ、新たに開削された道も、山や谷を数多く越えなければならない長い道であったため、山道開通後も従来の海岸を選ぶ者もあったようだ(注4)。特に冬は松浦武四郎も「…山中は雪で道が通れないとき、今もその海岸を通る…」と記述している(注5)。また海沿いの道でも特に険しい海岸が長く続くチセウシからサルマまでは舟で行く方法もとられたようである(注6)。

現在ここには昭和十一年に竣工した黄金道路と呼ばれている道路がある。黄金は景色を指すのではな

1) 東京農業大学 榎本・横井研究会

く、費用が莫大で黄金を敷き詰めたようにかかったことから名づけられたという。しかし断崖を切り開いて作った道路は、絶えず崖崩れや波を被る危険があったため、その後も改良工事が重ねられ、現在多くの部分はトンネルで安全に通行できるようになっている。

さて、それでは本稿を三つに区分し、まず今回古道を歩いた体験を記し、次いで榎本とえりもの関わり的一端を述べ、最後に榎本の人となりを紹介することとしたい。

注 1 『えりも町・ふるさと再発見シリーズ3 えりも・猿留山道』猿留山道復元ボランティア実行委員会、2003年、p.3

注 2 谷元旦『蝦夷紀行』寛政十一年(1799)前掲書p.5

注 3 谷元旦『蝦夷紀行附図』前掲書p.6

注 4 福居芳麿『蝦夷の島踏』享和元年(1801)前掲書p.10

注 5 松浦武四郎『武四郎廻浦日記』安政三年(1856)前掲書p.33

注 6 松浦武四郎『戊午東西蝦夷山川地里取調日誌』安政五年(1858)前掲書p.44

第一節 えりもの古道を歩く

平成22年9月18日、様似山道を歩く。実際の山道はオソフケウシから幌満までの7キロということであるが、今回の行程は少し短縮してコトニ小休所跡近くの昆布干し場から11時30分に出発する。山道を暫く入ると、山中を通行する人のために当時置かれていた原田旅宿の跡があるが、周りに何も無い全くの山の中であり営業の労苦が偲ばれる。この近くで昼食をとる。この道は地形に沿って作られた複雑な山道であり、登ったと思うとまた下り、実際の距離から受ける感じよりは遥かに厳しく感じられる。

しかし、この日は好天に恵まれ、原田旅宿跡から先にある日高耶馬溪を見下ろす地点での景色は美しく、李白岩(現在の鶴の鳥岩、筆者注)が見え、断崖

絶壁から見下ろすと崖に貼り付くように出来た道路の直ぐ脇に、穏やかに青く澄んだ海の波が音もなく寄せているのを眺めることが出来た。ただ、海が荒れれば通行が出来なくなるのは勿論のこと、満潮時や風雨の場合も通行が著しく困難となるであろうことが容易に推測される厳しい地形である。しかしながら現在の道路は、特に危険な場所はトンネル内通行に代り、一部海岸を通る地点も急崖は頑丈に補強されている。16時に幌満橋に着く。

翌19日は猿留山道に入る。今回の事業の主目的である山道復元整備に便乗しての山歩き、写真を撮るなどして最後尾を続け皆のお荷物となったが、この道を独りで歩くのは非常に困難である。山道は今もヒグマの生息地でシカ、キタキツネなどの多くの野生動物が住む危険な場所である。今回もヒグマ対策として鈴を鳴らしながら大勢で歩いた。



猿留山道(一部林道になっている)を歩く。

話が前後するが、最終日の20日に行われた百人浜までの、自然を愛でる山歩きの時の、主催者の道々での話に「つい3日前の下見の時にあったシカの死骸が今日は無い。熊が持って行ったのであろう」というのがあった。また、参加者の中にはスズメ蜂対策として養蜂業者が使う網を被った人もいたので、大袈裟な人がいるものだと思っていたところ、この日はシカの死骸があったという近くの笹道で、黒スズメ蜂と思われる蜂に襲われ、頭を刺された人が二人出た。筆者も足を刺され、脛から腿までが倍近く

腫れて熱を持ち、蜂の獐猛さを身を以って知ることとなった。また、筐の中には小さなダニも棲息しており、筐漕ぎ（筐をこぐようにかき分け歩くこと、筆者注）の後は目に見えない小さなダニが飛んでたかるといふことで、主催者が用意してくれたガムテープで服についたダニを取り除く作業も行った。またこの日、百人浜の海を見おろす広大な草原をシカ2頭が大きな跳躍をしてあつという間に駆け去ったさまに出会うなどは、異次元の世界に居ようであった。毎年シカの角を拾うイベントも開かれ、大勢の参加者で賑わうそうである。



猿留山道からも襟裳岬、百人浜を一望できる。

さて、19日の猿留山道の話に戻る。出発は豊似岳登山口の脇の旧肉牛牧場事務所跡を8時40分。ここからの距離はおよそ15キロ弱とのこと。様似山道に比べると、距離は長いがなだらかな道が多く歩きやすい。アアツ川を渡る。この近くの江戸時代の休憩所の一つアツツからは、百人浜の雄大な景色が眺められるというが、この日は雨模様で急いで通り過ぎた。ガロウ川を渡り暫く歩いて沼見峠、12時15分に到着、昼食をとる。ここは山々の尾根が馬の背のようになっている地形であり眺望がきく。ここには妙見菩薩と馬頭観世音菩薩が祀られていた。右に海、左に豊似岳や観音岳、その裾に神秘の色を湛えた豊似湖を望む。豊似湖と豊似岳にはアイヌの伝説が伝わっており、ここを何度も訪ねた松浦武四郎の『東蝦夷日誌』には、湖には「神霊（カムイ）が

いるから見ないように」と言われたことを記している（注7）。また豊似岳にも安政三年に登山を試みるが、案内のアイヌに「神霊がいて…」と恐れられて果たせず、安政五年にやっと登頂したとある（注8）。そしてこの日誌には頂上からの眺めた絵や、雌阿寒岳の頂上に昇る煙を詠んだ歌等が多数添えられている。沼見峠を12時30分に出発。豊似湖を左に見ながら山を下りワラビタイ川を渡る。滑りやすい沢には梯子やロープが用意されていた。ワラビタイ川に沿った経路を歩きながら、漸く長い道中も終わりに近づいたという安堵感が湧いてきた。14時45分に猿留山道橋に到着する。

今回の山行は、予想よりも厳しいものであったが、幕末・明治初期の先人の労苦を現地に於いて偲ぶことが出来たと感謝している。

注7 松浦武四郎『蝦夷日誌』弘化二年（1845）前掲書、p.19

注8 松浦武四郎『東蝦夷日誌』安政四、五年（1857,1858）前掲書、p.50

第二節 榎本武揚とえりものかかわり

一 榎本、最初の渡道

嘉永七年（1854）、榎本がまだ釜次郎と呼ばれていた19歳の夏に初めて渡道している。幕府の勘定吟味役村垣^{むらがきのりまさ}範正、箱館奉行堀^{ほりおりべのしょうとしひろ}織部正利^{しほ}熙は蝦夷地及び樺太の警備や視察のためえりもを通ったが、この時榎本は、堀の私的な従者として一行に加わっていたようである（注9）。榎本が何故堀の小姓となったかについては榎本の父が伊能忠敬の弟子であったことや、後に幕府の天文方に勤務していた時の人脈によるものではないかと言われているが、従者であったため詳細はわかっていない。しかし、今回のえりも訪問で、村垣の従者であった忠蔵の『蝦夷紀行』がえりも史に収録されている事を知り（注10）、その中の記述から榎本釜次郎の最初の渡道の時期につ

いての史料を得ることができたのは大きな発見であった。

- 注9 榎本隆充・高成田享編『榎本武揚』藤原書店、2008、p.302（『旧幕府第五号』明治三十年、榎本の記述、また、カッティンティンディ-ケ『長崎海軍伝習所の日々』の榎本の榎本太行き記述による。）朝比奈知泉『明治功臣録』明治功臣録刊行会、1917、p.526
一戸隆次郎『榎本武揚子』嵩山房、1909、p.72
注10 忠藏（村垣の従者）『蝦夷紀行』前掲書、p.25

二 開拓使としての資源調査

榎本は戊辰戦争の最後まで官軍と戦った末に、箱館戦争でやむなく降伏したが、その人物を惜しまれ明治新政府に出仕。明治五年（1872）に開拓使四等官（県令、今の県知事に相当する高官、筆者注）として北海道を調査している。先ず明治5年には主に道央・道南の資源調査を行い、翌明治6年には道央・道東の調査に赴いた。この調査の目的は、明治新政府の最優先課題であった鉱業開発のため、石炭、砂金、硫黄等の調査が主であったことから、えりもに滞在したのは、道東に向かう経路に於いては10月18日から20日までの3日間、同じく復路に於いては11月16日、17日の2日間、都合5日の短いものであったが、道央・道東の調査行程約1千キロを48日間で踏破するという強行軍の中で、まさに寸暇を惜しんでその任に当たった様子が日記に克明に記されている。以下、榎本がえりもに滞在した5日間について、その日記に従って、彼の足跡をたどってみたい。

十月十八日 曇 東風

一、朝七時寒暖計十四度半。七時半浦河ヲ発シ海岸通三里余ニシテ「シャマニ」ニ至リ早午飯ヲ加ヘ夫ヨリ海岸通二里ニシテ「シャマニ」山道ニ登ル。上下五回。路甚嶮ナラズ。只下り路近キニ至テ悪キ石

路アルノミ。山道ノ長サ約二里。



様似山道、幌満近くの沢を下る。

様似山道について、榎本は「路は険しくない」としているが、馬に乗って通行したようだ。道中最後の方でやれやれやと下ると思った時に「下り路に悪い石路がある」とあり馬でも難儀したようである。

夫ヨリ海岸ニ出。六時半幌泉着。幌泉ハ湊浦川ヨリモ宜シク且ツ有名ノ昆布場ニシテ人家三十軒許。娼楼等モアル由。此辺ニテ繁盛郷タリ。秋味獵モ元來為セリト雖ドモ改テ本年ヨリ出税ノ則モ定マレリト。今年ハ八月十五日ヨリ始メ共ニ海岸ニテ漁スルモノナリ。「ホロイズミ」領中建網五投ニシテ平均一千石ヲ得ルト云。着後直チニ蘆澤中主典ヲ喚呼。外国人二名通行セシ事ノ顛末ヲ尋ヌ。甚分明ナラズ由テ之ヲ逐テ捕フベキヲ命ズ。夜中雨風頗烈。夕六時半十六度。

当時の幌泉の繁栄ぶり、サケ漁の税金のこと、漁獲高のこと、外人通行の情報等を記録している。

十月十九日 雨西北風 午前十時ヨリ晴

一、雨徹朝七時半十六度二。夜来ノ雨ニテ前途河水漲テ通行スル不能ヲ駆遣ヨリ告来ル。無抛逗留。午後傭夫二人ヲ僦ヒ山手ノ方ニ入り河岸ヲ一見ス。皆古キ「アルコスエールゴロント（アルコスはarkose 花崗質砂岩か、筆者注、以下同じ）」ニシテ河底ハ皆大小

ノ「ガラコート (不明)」ニ「コイカ (マイカ、mica 雲母か)」及「クウアルツ (quartz 石英か)」ヲ含メリ。此河底及兩岸ノ土ニ沙金を含メルコト分明ナリ。又此河岸ノ「スレート (slate 粘板岩か)」様ナル中ニ多少ノ石筆 (石筆石か) ヲ含メリ。

一、予ノ見シ所ハ僅ニ半日ナルヲ以テ礦物ヲ審スル能ハズト雖ドモ役所ニ採置ケル礦石ヲ見ルニ他奇ナシ。

一、本日経過スルニ幌泉ノ此小キノ沢ハ平面五十万坪ニ及ビ西南ノ際ニ向ヒ余ハ皆山ニテ囲ミ土肥水理好ク實ニ上好ノ畦圃トナルベシ。樹ハ檜柏ヲ以テ最多トス。此ノ一大平地ハ海面ヨリ五^{びん}匁 (I 匁 = 7 尺) 乃至十匁ノ高ニ及ブ。之ヲ「アベヤキ」ノ沢ト云フ。沢ニ向テ左側ハ「アベヤキ」河流ル。即チ前ニ記スル「ガラニート (granite 花崗岩か)」ノ硯アルモノナリ。此沢ニ続ケル五万乃至十万坪位ノ平地別ニアリ。移住民大根、蒜、菜、薯等ヲ作ル共佳土ハ黒色ニシテ粘土ヲ交ヘ厚サ三尺余皆然リ沙ナシ。

此沢ノ向ヒニ屹立セル山ハ古キ「フコルカンセ (オランダ語の火山性か)」ノ山タルコト分明ナリ。

一、十五時帰館。本日午後一時十八度。六時十五度。入夜星光天風風ク。

夜来「ガラネート (granite 花崗岩か)」礦ヲ持来ルモノアリ自ラ石炭ナリト称ス。是ハ本日尋ネシ処ヨリ少シク上ノ方ヨリ出ルト云フ。

前夜来の雨で河の水が溢れ通行不能の足止めをされている。それでも山に入り鉱物、土壌の調査をしている。鉱物特に石炭、砂金の資源調査が目的であったため住民からも情報収集をしている。

十月二十日 薄陰北風頗烈

一、六時幌泉出発。直チニ一個ノ「プラトー (plateau 台地)」ヲ行ク。篠地ニシテ樹木ハ檜柏楓シナ等ヲ以テ多トス。此「プラトー」甚広シ好牧馬場トナルベシ。此「プラトー」ノ海岸寄ノ方ハ大抵四面皆山ニ

シテ西方ヲ少シク開クノミ。地「プラトー」ヨリモ低ク草木繁茂。幅員五十万坪ニ及ブベシ。真ニ立派ナル村落ヲ為スベシ。「プラトー」並ニ此低地モ共ニ十分水利アリ。

「水利にも恵まれ、好き放牧場ともなり、立派な村落になるであろう」との予測通り、町営の牧野になっている。



猿留山道は町有牧野と日高山脈の山塊の間を通る。

夫ヨリ行クコト三里許ニシテ山道に掛ル。山道石多ク上下格別ナシ。其下リ坂ノ処ハ甚高クシテ一個ノ大「プリユトニカ (plutonic, 深成、火成か)」ノ山 (豊似岳もしくは観音岳) 屹立ス。下ニ湖 (豊似湖) アリ。此湖モ亦平尋ノ山位ノ処ニアリ。旧火山ノ証トスベシ。二時「サル」着。午飯ヲ加フ。幌泉ヨリ「サル」迄ハ七里ニシテ皆山道ナリ。「シャマニ」ヨリモ難渋ナリ。馬上疲ル。三時半「サル」ヲ出少シク海岸ヲ行キ又々山道ヲ行クコト三里余。時ニ天已ニ昏其海岸ニ出ル処ニ一大河アリ。之ヲ燭ニテ渡リ夫ヨリ海岸通一里半許ニシテ又々山道一里ニシテ夜九時半漸ク広尾ノ会所に止宿ス。途次蠟燭尽キ闇夜ニ山路ヲ馬ニテ行キ急流ヲ渡ルコト数度タリシ。着後雨至ル。当初ハ福鳶屋持ナリ。本日行程十二里余。路甚嶮且迂。

○広尾会所ハ「プラトー」ノ上ニアリ。

○本日朝五時十分十三度。夜十時十六度三。暖氣可知。

この日榎本一行の行程は幌泉から広尾までの路12里あまりと書いている。馬に乗ったとは言え、途中で日が暮れ蠟燭が尽きて、闇夜の山道を行き急流を渡ること数度であったと記している。そして様似道より難渋したと感想を述べている。この行程ではサルマで一泊するのが普通であるようだが(注11)前日雨で足止めされたので先を急いだのであろう。余程のことがなければ難儀を記すことはないのこの日の行程は相当の疲労だったと思われる。なお、豊似岳や観音岳、豊似湖を眺めて、それが火山性のものではないかと言っているが、科学の進歩した今日では、日高山脈がプレート同士の衝突による造山運動でせり上がってできたのだらうと言われている。



猿留山道沼見峠から豊似湖を望む

なお、榎本は当時日本人として最高の知識を有しており、彼が明治12年に設立した東京地学協会は、今日まで地学分野において権威ある組織として発展し、現在発行されている『地学雑誌』は最新研究の発表の場となっている。彼の知識は日本人最初の西洋留学生として学んだものであり、そのことは最後に伝記で簡単に紹介する。

十一月十六日 晴

(前夜は当縁泊、筆者注)五時起理征装寒威頗酷。五時四十分氷点下四度五。五時半出立。馬ノ良ナルヲ以テ十時半広尾に至ル。(中略)午後三時広尾出立馬驚ニシテ鞭トモ進マズ。山道ニ於イテ日将暮西風吹

雪来寂寥トシテ好懐ナシ。時ニ従者皆遅ルヲ以テ弱鞭驚。七時漸ク「サルマ」ニ着ス。

○夜八時半氷点下一度七。

○過日教置キシ葡萄酒ヲ検スルニ醸充分ナラザルヲ以テ未タ成ラザル然レドモ色味佳。

○怪物ノ奇談等アリ。夜半西風甚烈。戸窓鳥々有声与波濤声遥ニ相応ズ。

○途中買来リタル鹿肉ニテ夜盃ヲ傾ク。

出立時の馬が良かったので、広尾では近辺の情報を持ち込んだ者とゆっくり歓談した後、3時と遅く出発したが、ここで乗り換えた馬が驚馬であったため、復路も途中で日が暮れ雪も降り出して難渋し、サルマに着いたのは七時となった。ここで榎本はお化けの話を書き残している。箱館戦争の修羅場を潜って来た榎本に、怪談話は似つかわしくなく、今まで彼の日記だけでは何があったか分らなかったが、今回のえりも訪問でその内容を知ることが出来た。この話はえりも町では広く語り継がれているとのことであるが、榎本の一面をよく伝えているものであり、敢えて紹介することとしたい。

先ず最初は、えりも町郷土資料館学芸員の中岡利泰氏に教えて頂いた二つの文献によるものである。原文のまま記す。

(一)『郷土誌の実際的研究』(注12)

「明治二、三年頃、番人目黒源吉は自分の番屋を旅館として行旅人を宿泊せしめていたものであったが、何れも深夜アイヌの女子(身長二尺位)の幽霊を見たとのことである。その頃、榎本武揚が日高沿岸を通過して十勝のほうへ行った事がある。その時、宿の主人からこの怪談を聞いたが、武揚の宿泊した夜はその幽霊は出なかったそうであるが、この後、少ししてから武揚の友人が又この地に来ることになっていたそうであるが頗る臆病者であった。武揚が出立する朝宿の主人から筆を借りて室の床柱に楷書

の一寸角位の文字で「相伝 此屋寝枕北時者 往々在云見怪」(相伝ふ 此部屋は北を枕に寝る時は往々怪を見ると云う マ)と書いて出立した。其の後やはりその男が来て宿泊し床柱を見て、又やどの主人から怪談を聞いた。そして薄気味悪く思ったが、武士の手前我慢をしてその部屋に寝たのである。夜中にふと目を開いて見たらスグ側にアイヌの幽霊が立っていた。驚いたその武士は側の刀を取って「エイッ」と切りつけた。宿の主人は又出たのかと思ひながらビクビク行って見ると、その武士は刀を抜いたまま部屋の真中に立っていた。障子には刀で切った跡が一文字に残り窓から差し込んだ月の影が円くそれに写っていた。現在ではその家は壊したので無いが、武揚の書いた床柱は猿留村の住人某が大切に保存しているとの事である。(床柱の事については猿留村の住人 工藤紋也氏=駆通旅館主人が知っているらしい マ)

(二) えりも『昔語り資料集—潮風とともに』(注13)

「榎本武揚が猿留に来たとき、化け物屋敷とって、化け物が出る部屋があったそうだ。榎本がなるべくお客さんが泊まらないような、お客さんと引付くような部屋はさけて、なるべく離れのような部屋に泊まったのが、化け物が出る部屋だった。朝帰る時に柱に何か書いていったそうだ。函館から来た人が当時で1000円で譲ってけれと言ったそうだけど、柱を切り取って持っていったけど函館大火で焼いてしまった。」

次は今回の交流会の席上で、えりも町在住の神子島清八氏(えりも町郷土資料館北緯42度の会会長、えりも昔語りを記録する会会長、1935年生まれ、現在76歳)から教えて頂いた話である。

神子島氏はこの刀傷を見ている。当時、氏は幌泉町の職員で、昭和33年の春、投票事務のため前日

からこの旅館(工藤旅館)に泊まった。八畳位の部屋に立派な黒っぽい床柱があり、目の高さに斜めに20センチ位の傷がついているので不思議に思って主人の工藤^{もんぢ}弥氏(当時の神子島氏から見て相当なお歳であったとのこと)に尋ねると、それは榎本が付けた刀傷だと教えてくれた。またその時の話では、この家の建前の時に大工さんが転落して亡くなったのでそれも幽霊に関係するかもしれないとも言われたとのこと。いろいろな古文書も沢山残っていて、工藤氏の妻^{かすみ}松也氏からそれも見せてもらったそうである。この旅館は平成になって火事になり無くなってしまい、持ち主も広尾に移住してしまったとのことであった。なお、ここでは刀傷が榎本のもものと伝わっているが、前の(一)で引用した『郷土史の実地的研究』では榎本の友人のもたと記録されている。伝聞の間に混乱したものであろう。

また中岡氏もこの話を工藤松也氏から聞いており、彼女の息子俊弥氏、嫁幸子氏にも伝えられているはずとのことであった。いずれにしてもその柱は、神子島氏が昭和になってから現物を確認していることから、明治期に大金をはたいて切り取った話は作り話のようである。榎本が柱に直説書いたのか、紙に書いて柱に貼ったのか、どちらにせよ原物が残っていないのは残念である。臆病な友人を冷やかすために書いたとしているが、後の宿泊者に書き残して行ったこのエピソードは榎本のユーモラスな一面を表して興味深い。

ところで榎本の幽霊話をもう一つ。文部大臣の時に東京で幽霊の正体を見たというエピソードが戸隆次郎の『榎本武揚子』にある(注14)。その一部を現代語に訳して引用する。

それは榎本が文部大臣となつてすぐ、その大臣邸が麴町永田町にあった時のことである。森有禮がこの邸で兇刃に倒れて以来幽霊現れると評判が立っていた。榎本がある日酔眼のまま燈火を手に持ち厠に

立った時、幽霊と思しき影が現れた。これは不思議よと熟くみても酔眼には幽霊としか見えなかった。しかしここで騒ぎ立てると女等を驚かし、世評を高からしめんのみとそのまま雨戸を締め寝についた。翌朝よく調べると、手洗い鉢の正面に大きな杉の立木があり、雨の夜葉の濡れた時燈火を後ろに置いて手を洗おうとすれば、自分の影が朦朧と映って幽霊に見えたのであった。

この話は、幽霊の正体を榎本が見破ったという伝聞を一戸氏が記したのであって、榎本自身が書いたものではない。その点で、榎本が実際記録しているえりもの伝説の話は、榎本の一面を良く表しており貴重である。

注11 『えりも町・ふるさと再発見シリーズ3』 p.18、45

注12 『郷土史の実際的研究』 幌泉尋常高等小学校、笛舞尋常小学校共同研究、第三節、第一伝説、その二、発行年不明

注13 『えりも昔語り資料集 - 潮風とともに』 p.110

注14 一戸隆次郎『榎本武揚子』前掲書、p.84

第三節 榎本武揚の実像

榎本武揚は幕末から明治維新期にかけて日本の発展のために大きな功績を残した人物でありながら、それを良く知る人は少ない。実際に「えのもとぶようを見に行こう」と誘われてどんな舞踊なのかと思って行ってみたら、榎本武揚のことであったという笑い話のような本当の話を聞いたことがある。何故に知られていないのだろうか。

それは、新政府の勝者側から見た歴史認識、さらに榎本自身何も語らず世を去ったこと、それに加えて福沢諭吉の書いた「瘠我慢の説」における榎本批判があげられると思う。福沢は榎本をその説で「旧幕臣の身でありながら新政府に仕え高位高官に上った二君にまみえる者」として批判しているのである。

一 榎本の生涯

榎本は天保七年(1836)江戸下谷御徒町(現在のJR御徒町駅に名前が残っている)、柳川横町、通称三味線掘にある徒歩(将軍の先導役。また、いざとなったら身代わりになるなど絶えずお側近くに控えている役目)の住む組屋敷に生まれた。

父箱田良助は備後(現在の広島県東部)の生まれであり、藩主に連れられ江戸に出府し伊能忠敬の内弟子となる。その後榎本家に養子に入り榎本円兵衛武規を名乗る。伊能の大作「大日本沿海輿地全図」は伊能の死後、内弟子筆頭となった武規が中心になって完成に至ったものと言う。しかし、入門は蝦夷地調査の後なので武規は幌泉を訪れてはいない。武揚の幼名は「釜次郎」、兄の名は「鍋太郎」である。父武規の明るい性格が偲ばれる。武揚は成長して後も友人達から「釜次郎」と親しく呼び捨てされていたようだ。釜次郎は幼時から温和であり学問好きであった。

○15歳(嘉永三年、1850)で昌平黌へ入学。

○18歳(嘉永六年、1853)卒業。

○19歳(安政元年、1854)蝦夷・樺太に行く。このことは第二節、一、に既述。

○22歳(安政四年、1857)で国内留学ともいえる長崎海軍伝習所に入り、機関学、航海術、兵学、舎密学(化学、筆者注)を学ぶ。この時主任教授のカッティンディーケに、彼の著書『長崎海軍伝習所の日々』で「大変優秀」と評価されている。その後築地海軍操練所に勤める。

○27歳(文久二年、1862)オランダ留学生として選ばれる。幕府は海軍力の増強を進めるため軍艦を発注するとともに、留学生を送ることにしたのである。品川から出港するが途中ジャワ島近くで難破するなど10ヶ月かかって到着。この時の留学生には、近代哲学の基礎を作った西周、医師林研海等がおり、軍艦操縦技術だけでなく、軍事に役立つ産業、西洋の技術を学ぶように命ぜられ、

榎本は留学生中、一番多くの学科（オランダ語、砲術、蒸気学、理学、化学、物理、数学）を学んでいる。モールス電信も実際に使って習得。その間ドイツ、イギリスの鉱山や鉄鋼所を訪問、また実際に起こったデンマークでの戦争を視察している。

○32歳（慶應三年、1867）竣工した軍艦「開陽丸」に乗り4カ月余で帰国。留学生仲間の林研海の妹多津と結婚。開陽丸乗組頭取を拝命。軍艦頭に出世。

○33歳（慶應四年、1868）戊辰戦争起り、幕府艦隊は箱館に向かう。開陽丸は三隻の軍艦、四隻の運送船を率いる。開陽丸、江差で座礁沈没するが、蝦夷地を平定し選挙で総裁に選ばれる。蝦夷共和国の誕生。

○34歳（明治二年、1869）五稜郭で降伏。榎本自刃を図ったが、部下がその刀をつかみ筋を切って指の自由を失いながらも止めに入り、果たすことが出来なかった。

箱館戦争で榎本と対峙した官軍の指揮官黒田清隆は、榎本の人物を深く惜しみ猛烈な赦免運動に奔走し救命する。その結果、三年後の明治五年に出牢し、同年開拓使四等出仕、北海道鉱山検査及び物産取調を拝命する。幕末期に先進国オランダに留学し、かつ広く実学を学んだ榎本は当時の日本第一級のテクノクラートであり、外交官であった。榎本の真髄は、まさに明治新政府において発揮されたと言える。以下、その活躍が如何に広範多岐であったかを、紙数の都合上項目のみ列挙する。

○北海道開拓使時代：37～38歳（明治五～六年）
幌内（現三笠市）、赤平、芦別炭鉱の発見
硫黄及び砂鉄の産地発見と製鉄業に対する貢献
農業・漁業・牧畜業の振興のための調査及び提言
○駐露全権公使、駐清特命全権公使時代：39～50歳（明治七～十八年）

樺太・千島交換条約の締結

『千島誌』『朝鮮事情』の翻訳

マリア・ルス号事件の解決

天津条約締結への貢献

欧州・清国関係情報の収集

シベリア横断と『シベリア日記』

露土戦争の情報分析

ロシアの元山港租借企図を察知封殺

○外務大臣時代：56～57歳（明治二十四～二十五年）

不平等条約改正問題への貢献

ポルトガルとの治外法権撤廃

メキシコ殖民

○農商務大臣時代：59～62歳（明治二十七～三十年）

官営八幡製鉄所の設立推進

浦賀船渠株式会社の設立推進

足尾鉍毒事件への取り組み

○その他

海底電信線敷設への取り組み

小笠原領有宣言への寄与

南洋諸島買収建議

日本近海諸島の領土編入に寄与

育英黌（東京農業大学の前身）設立

皇居造営副総裁としての取り組み

会長職等

東京地学協会（明治十二）副社長後社長、電気学会（明治十七年）初代会長、

日本家禽協会（明治二十一年）会長、日本写真会（明治二十二年）会長、

日本気象学会（明治二十五年）会頭、殖民協会（明治二十六年）初代会頭、

工業化学会（明治三十一年）初代会長、大日本窯業協会（明治三十一年）会長、

日本電友協会会長また、旧幕府関係の会として

葵会（明治二十二年）会長、同方会（明治二十八年）会長、日光保晃会会長、

東京彫工会会長、江戸會会長、碧血會会長

これら会長職は、彼の知識が必要とされたものや、自ら必要と思い創りだした会など、単なる名誉職ではなく精力的に活動したものである。

なお、富国強兵一色の当時にあつて、足尾鉍毒事件への関わりは、公害に正面から向かおうとした当時の政府高官としては類を見ないものであり、榎本の人間性をよく表しているものである。詳しくは拙論『榎本武揚と横井時敏 東京農大二人の学祖』（東京農大出版会、2008）に収めているので割愛する。

○明治四十一年（1908）十月二十七日、榎本 73 歳で逝去。海軍葬が東京駒込吉祥寺で営まれる。その葬列の長さは、先頭が寺に着いた時、最後尾は住居のあった隅田川東岸の向島の自宅にあつたという。

ところで、本節冒頭で榎本は自分を語らなかつたと述べたが、榎本自身は調査記録の類と認識していた『シベリア日記』と『渡蘭日記』が残されている。『シベリア日記』は榎本が発表をためらい筐底に秘していたものを、大正時代に家人が発見し、昭和になってから世に出したものである。この日記はロシア公使として赴任した先から任を終えて帰国する際、当時知られていなかった未開地のシベリアを馬車と船で踏査した記録である。大変な調査記録でありながら公表しなかつたのは、任務であつた樺太帰属問題で成し遂げた「樺太千島交換条約」締結の際に、樺太を失ってしまったという非難を一身に浴びたからということばかりでなく、功名心云々と言われることを危惧したことからと思われる。なお調査記録とは言いながら諸処にユーモアのある率直な書きぶりが見られ興味深い。たとえば、ロシアの若い美しい女性を見ると「すこぶる人をして心酔わしむ」とか、シヌルキーという獣を拳銃で撃とうとした際逃げられて「死ぬる気ならなぜ逃げるか」などの駄洒

落が書かれていたりする。榎本は自伝の類は残さなかつたが、これらのようなものからもその人となりがうかがわれる。『渡蘭日記』は留学先のオランダへの途上、科学者の目で克明に記した船上日記を彼が破棄しようとしたのを、留学生仲間の沢太郎左衛門が貰い受けたことにより残ったものである。

榎本はこのようにまったく自己顕示などしない人間であつた。福沢諭吉に生き方を批判されたが、福沢の残した多くの著作と比較してみる時、武士道精神を体現している榎本の人間性が見えてくるのである。

また榎本は情け深く涙もろい人間であつた。箱館戦争を共に戦い、後に初代英国大使となつた義兄^{はやしたかす}林 董は、榎本を評して「漢学者流義の人で、己が正直なあまり（他人もそうだと思ひ）容易に欺かれることが多かつた・・・官吏としては一緒に仕事をするのに困つた」と一抹の危惧を覚えながらも「友としては最高の人間である」と述べている。また、同時代に生きた榎本研究家の一戸隆次郎は「翁は如何なる場合といえども権謀術策を用いず、自ら信ずる処をあくまで実行・・・」と評している。終生「べらんめー」調の言葉で話し、酒を愛し、誰彼と分け隔てなくえらぶことがなかつた。幕府最高学府の昌平黌に学び、幕府留学生第一号としてオランダに渡り大学教授からいろいろな学問を学び、西洋の合理精神を身につけて帰国し、官軍に最後まで抵抗した人間という謹厳なイメージからは想像できないものである。

二 福沢諭吉の「瘠我慢の説」

「瘠我慢の説」とは、福沢諭吉が勝海舟と榎本武揚の維新前後の生き方を批判した文章である。その批判の主たる対象は勝であるが、その矛先が榎本にも向けられたのであつた。この説に対して勝側からの反論は幾度もされており、現在における勝に対する

評価も、明治維新の際に国内が戦火に晒されることなく政権交代を為しえた功労者として定着している。しかし榎本側からの反論は殆どない。榎本は福沢からどのように思うかを問われたが答えなかった。「瘠我慢の説」をめぐる榎本と福沢の関係については、既に『近代日本の万能人・榎本武揚』（藤原書店）の中で、「瘠我慢の説に対する反論」として拙論を詳しく述べているので、ここでは要点のみに絞って記述する。

（一）福沢の主張

「瘠我慢の説」の主旨は、勝に対して、「古来日本人が持っていた武士として大切な瘠我慢の精神を發揮することなく、戊辰戦争時官軍に無抵抗であった」こと、さらに勝および榎本に対して、「幕府の要職にいた人間が、維新後明治政府に仕官し、かつ高位高官の地位にいる」ことを批判したものである。福沢は榎本に対しては、まずは「三河武士の精神で必敗を予期しながらも戦った。そのことは天晴れであった」と褒めているが、「しかしその後の行動がいけない」と批判している。どのようにいけなさを纏めてみると次の2点に絞られる。

○榎本を総督と頼み榎本の為には戦い戦死したのに、降参したのではその者達が見捨てられたも同然である。往時を回想する時は寝覚めが悪いだろう。

○さらには新政府に出仕して口を糊するばかりでなく、「青雲の志」を持って富貴得々である。このような人は遁世の道がよい。功名を汚さないものとしてお勧めする。

（二）榎本の立場

福沢の批判に対して、榎本は何も答えてはいない。しかしながら榎本の立場から眺めてみると、福沢の批判は当たっていないことが分る。

○箱館戦争における降参について

福沢は「榎本に随従し、命令に従いて・・・」と言っているが、これは違う。将軍徳川慶喜が早々と恭順してしまったので、抗戦を主張する者の行き場がなくなってしまった。戦いの先頭に立つべき将軍がいなくなったので軍艦開陽丸を持つ榎本を頼って集まってきたものであった。福沢はこの説の中で、項羽と劉邦の事例を出し、『烏江水浅くして難能く逝くも、一片の義心東すべからず』とは、楚軍が打ち破られ項羽が自刃したことの心情を詩句にしたものである。中国楚の時代の項羽を持ち出すのは適当ではないと思うが（榎本もそうすべきだった）と、榎本と比較している。しかし、榎本は項羽と違って、頭目なって国家覇権を争ったのではなく、政権を打倒せんとするクーデターに対抗する家臣団の代表であったのである。幕府軍はいろいろの集団からなっていた。品川沖から脱走するときは、彰義隊の残党、輪王寺宮、フランス人傭兵らを、仙台からは諸藩からの兵士、新撰組、諸侯等を乗せて初めて蝦夷を目指したのであった。この時には幕臣達の糊口のため、皇国の北海の守りのため、開拓のためという訴えを明確に出している。この後に箱館で蝦夷共和国を建て、選挙で選ばれた時に初めて代表になったのである。

そして箱館戦争における榎本の統率を見ると、榎本が如何に信頼されていたかが分る。一例を挙げれば、開陽丸が座礁沈没した後、官軍の手に渡った鋼鉄船を奪う目的で宮古湾で壮烈に戦い敗れて帰ってきたが、その様子を「回天号が箱館に帰って来ると、本館の甲板上は夥しい死体や負傷者で惨状を極めていた。その時榎本総裁は、死者には脱帽して念仏し、負傷者には懇ろに慰め、布施氏が氣息奄々として倒れているのを見ると、涙を揮って進み近づき、『御代々様も御満足に思われたでしょう』と言うと布施氏はにっこり微笑んで喜びが顔に溢れ、気管に微音を響かせて息をひきとった」とその場に居た安藤太

郎は話している。また土方歳三の戦死の報告を聞いた榎本は次のようであったという。「釜次郎（榎本）五稜郭に在り、これを聞きかつ哭しかつ怒り、自ら出て戦わんとす。齊藤辰吉等擁して之を止む」（『旧幕府第五号』）

福沢は「降参したのはいかなるものか。反対の声を挙げる者の中には、『戦勝を期して戦ったのではなく、死を以って二百五十年の徳川宗家に報いるのみ』と云って父子ともに切り死にしたものがいた」と言っている。確かに反対するものもいたであろう。小杉雅之進の『^{ばくそうく}麥叢録』によれば、官軍の相次ぐ攻勢に追い詰められ、兵の疲弊は限界に達し、逃亡者を出すような状態であったことが書かれている。福沢のいう切り死にした親子とは、中島三郎助とその長男、次男のことであるが、これは降伏する前日に死んでいるのである。

中島親子を取り上げて述べるならば、正確な情報を得て書いたのだろうか。榎本はもはやこれまでと覚悟したのである。これ以上戦って死ぬのは無駄死と判断したのである。しかし、榎本は頭目となって戦った以上責任をとろうとして、自分の命と引き換えに皆の命を救うことができるのならと自刃しようとしたのである。榎本は西洋に留学して合理的な生き方も身につけていたのであるが、あえて武士道を重んじたのであろう。榎本は獄中から家族宛てに出した手紙には「私儀はまでの艱難配意はととも御面会仕らでは紙筆に尽難く候。さり乍ら一言にて申し上げ候えば、衆に代わり生命を捨て候段、士道に背きことこれなく候・・・」と書いている。

無駄死については福沢自身も『学問のすゝめ』七編で言及している。その中で、死をもって値する時にのみそれが許されると言っている。その福沢の行った榎本への批判は趣旨が一貫しているとは言い難い。さらに、榎本の戦いを問題にする前に福沢自身の行動を考えてみる。福沢も幕臣であったのだが、官軍、幕軍どちらにも距離を置いて傍観者となって

いた。いよいよ江戸に官軍が攻め込んでこようという時にはどこかに逃げ込もうと思ひ、紀州屋敷（現在の芝離宮、筆者注）に逃げる用意をしていた。また、「戦争するなら銘々勝手にしろと裏も表もなくその趣意で貫いていたから、私の身も塾も危ういところを無難に過ごした」と述べている。そして、寛永寺での彰義隊と官軍との戦いがあつた日には、塾で授業している。「大砲の音がどんとどんと鳴るので、生徒らは煙でも見えるかと面白がつて梯子に登って屋根の上から見物した。こちらに關係がなければ怖いこともない。」と書いている。（福沢諭吉『福翁自伝』より）

榎本はこのような福沢に批判されなければならないのだろうか。「自国の衰退に際し、敵に対して勝算なき場合にも、力の限りを尽くして瘠我慢をすべき」と福沢は言いながら、自分は弾の飛んでこないところにいたのである。

○明治新政府に出仕したことへの批判について

榎本は獄中で、国の為は何もしていないとの思いを漢詩に詠み、家族に宛てた手紙の中でも、生かされて獄を出たなら「日本国金銀山の開き方、蝦夷嶋開拓の必要の事柄」と新しい日本に尽くそうとする思いを述べている。そして箱館戦争における官軍の指揮官黒田清隆の奔走により赦免され、北海道開拓使に仕官してからは寝食を惜しんで北海道の調査をしている。また、後にロシア公使任官の内諾を求められた時、「邦家の為死力を尽し御奉公仕るは予て懇禱の事」と承諾したが、海軍中將の肩書については難く辞退していた。ただ、この肩書はロシアとの外交上必要なものであったので、富貴を求めて仕官したのではない榎本も、国家の威信のため受けざるを得なかったのである。徳川政権は国家機構を築き直そうとして榎本達をオランダに留学させた。榎本は国家に対しその使命を果たすために新政府に出仕したのである。福沢から「青雲の志」と4回も繰り

返し言われたが、当時第一級の知識人であった榎本は明治新政府にとって必要とされた人物であった。必要とされたから結果的に出世したのであって、福沢が言うように立身出世の望みを抱いたからではない。

それから、福沢が勧めた「遁世出家して死者の菩提を弔う」ことについては、榎本は官吏となり己の使命を果たしながらも、絶えず命を落とした仲間を弔い、遺族の生活の心配をしている。そして、身を落として困窮した友の為にも金銭的援助や生活が成り行くように世話をしている。榎本が切腹を図った際に小姓の大塚鶴之丞が刀を手でつかみ右指三本の筋を切る傷を負いながら制止したことは先に触れたが、榎本は生涯それを気にかけて何かと面倒を見ている。また、ロシア公使として単身赴任した時、箱館戦争の旧幕臣の仲間が困っていたら出来るだけの面倒を見るようにと、度々家族に手紙を書いている。また、中島三郎助の家族に宛てた手紙が残っており、それには三男の将来の面倒を見ると約束している。成人した三男はグラスゴー大学へ留学し、その後海軍中將にまでなっている。

三 榎本の開拓使時代調査の功績

明治五年、六の北海道開拓使時代の記録を読むと、夏から初冬にかけてアイヌの案内で未開の地を、時に風雪、霰等の厳しい気象条件と戦いながらの調査を行っている。道南では古武井の鉄山、恵山の硫黄調査、泉沢、鷲の木石油調査。道央では茅沼炭鉱での石炭調査、泊村での鉛、亜鉛調査、幌内炭鉱、空知(芦別、赤平、筆者注)炭山調査。道東では砂金、石炭調査。また、道央および道東においては農業、漁業、牧畜業等の調査まで行っている。榎本は土地の調査を科学者として、かつ経営者としての視点で行い、これらは後々日本国内の産業発展の基礎となったのである。しかしながら、これら榎本の功績は、

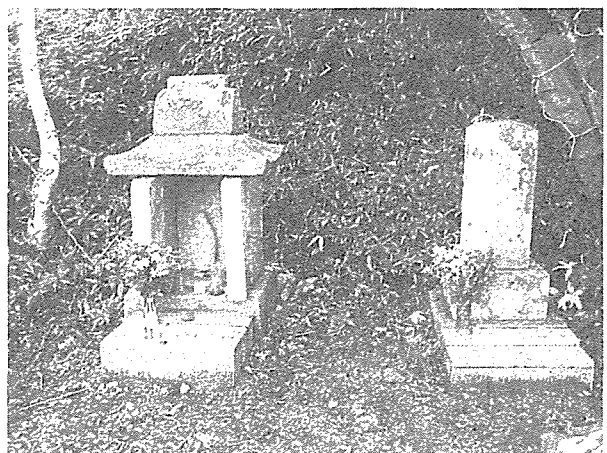
これまで至当に評価されることはなかった。例えば、幌内、空知石炭山は、後に大規模炭鉱に発展するが、この発見は榎本の功績でありながら、現在ではケブロン、ライマンらのお雇い外国人の功績となっている。調査記録に「功績は榎本のものである」と部下によって記されているところがあり、それについて『榎本武揚伝』の著者井黒弥太郎は「公の記録では異例のことである」と述べている。特に、空知石炭山の発見については、「自分が検査したのもって濫觴とするものである」と榎本自ら記述している。

これらの事実は1960年代になって初めて加茂儀一や井黒弥太郎によって明らかにされた。榎本は薩長の藩閥政治の中にあつて、旧幕府軍の首魁でありながら大臣の地位にまで昇った立場を思ったのであろうか、国家のために多大な貢献をしながらも何も自己を主張することなく、福沢の批判に対して答えることなく世を去ったのである。

従つて、福沢は榎本が北海道開拓使になったことは知つていても、先進国で得てきた広範な知識と視野をもって日本の近代化に尽くそうとする榎本の熱意と実績については、知らなかったはずであり、福沢の榎本批判は正鵠を誤まるものであったと言えよう。福沢は「瘠我慢の説」で「いざことを構えた時、抵抗精神がなくては国を維持することが出来ない」と述べている。榎本は抵抗精神をもち、そして、国のために尽くした、まさに福沢の求めた人間であつたのである。

参考・引用文献

- 秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』（北海道沿海実測図・伊能間宮図）北海道大学図書出版会
- 井黒弥太郎『榎本武揚伝』みやま書房、1968
- 一戸隆次郎『榎本武揚子』嵩山房出版、1909
- 伊藤正雄「瘠我慢の説」私説、神戸女子大学紀要第4巻、1975
- 「榎本武揚子のおひたち」『旧幕府』1巻1号、1897
- 「榎本子談話」『旧幕府』1巻5号、1897
- 榎本隆充『榎本武揚未公開書簡集』新人物往来社、2003
- 榎本隆充・高成田享編『近代日本の万能人・榎本武揚』藤原書店、2008
- 『榎本武揚と横井時敬 東京農大二人の学祖』東京農大出版会、2008
- 『えりも町ふるさと再発見シリーズ3 えりも・猿留山道』猿留山道復元ボランティア実行委員会、2003
- 『えりも昔語り資料集 潮風とともに』えりも昔語りを記録する会、2007
- カッティンディーケ著水田信利訳『長崎海軍伝習所の日々』平凡社東洋文庫、1975
- 加茂儀一『榎本武揚』中央公論社、1960
- 加茂儀一『資料榎本武揚』新人物往来社、1969
- 「郷土誌の実際的研究」幌泉尋常高等学校、笛舞尋常小学校共同研究
- 小杉雅之進『麥叢録』市立函館図書館蔵郷土資料館複製叢書31 図書裡会（市立函館図書館内）1993
- 三枝廣音・飯田賢一編『日本近代製鉄技術発達史』東洋経済新報社、1957
- 佐久間達夫『伊能忠敬 測量日記 第一巻』大空社、1998
- 『実用北海道新地図』函館書林 大盛堂蔵、1901
- 『地学雑誌』東京地学協会、日本列島の古地理学、2010
- 富田正文「福沢諭吉と榎本武揚」『新文明』新文明社、1951
- 『幕末・明治国勢地図 輯製二十万分一図集成』柏書房、1983（二十万分一図は明治二十三年 陸軍参謀本部陸地測量部作成）
- 『箱田良助と榎本武揚』福山城博物館、2009
- 広瀬彦太編『榎本武揚 西比利亞日記』東兆書院、1943
- 福沢諭吉『学問のすゝめ』岩波文庫、2005
- 『福翁自伝』岩波文庫、2005
- 『福沢諭吉書簡集』1～9巻、慶應義塾出版、2001～2003
- 『福沢諭吉著作集』9、慶應義塾出版、2002
- 『丁丑公論・瘠我慢の説』講談社学術文庫、2000
- 松田藤四郎『榎本武揚と東京農大』東京農大出版会、2001
- 宮永 孝『幕末オランダ留学生の研究』日本経済評論社、1990
- 「日高山脈21世紀プロジェクト 山を調べる4」横田光俊
- 森 銚三『明治人物逸話辞典』上、東京堂、1987
- 脇 哲『軍艦開陽丸物語』新人物往来社、1990
- 渡邊一郎『幕府天文方御用 伊能測量隊まかり通る』NTT出版、1993



猿留山道沼見峠、江戸時代建立の妙見神（安政六年1859）と馬頭観世音菩薩（文久元年1861）